

〈目的〉 1949年に制定された教育職員免許法に基づいて設置された「家庭科教育法」により、家庭科教育は教科教育法としての研究が始められてきた。以来、「家庭科教育法」から「家庭科教育学」として成立するために、常に専門的立場からの議論がなされている。学問としての歴史は浅いが、今日では、従来の「家庭科教育法」とは異なり、「家庭科教育学」と銘打った著書が出版されるようになった。本来、教科教育論としては家庭科の本質、目標、構造、構成、方法などの基本的研究を中心に、歴史的、社会的、実践的な研究などがその内容として設定されるわけであるが、今まで出版された「家庭科教育法(学)」の著書には、著者らのさまざまな見解が示されており、なおも家庭科教育学の学体系を構築するための研究が続けられている。本研究においては、家庭科教育学の体系化とめざすための一資料として、今日的段階の諸問題の整理をすることを試みたい。

〈方法〉 各出版社から出版された「家庭科教育法」「家庭科教育学」(初等教育のみを対象としたものは除く)に関する著書を収集し、その内容構成と、特に家庭科教育の本質について、分析、検討を行った。

〈結果〉 「家庭科教育法」として出版された初期の著書には、いわゆる本質論を述べている部分が少なく、具体的な実践方法を示している部分の多いものが見られた。また、一般的な方法論のみで、家庭科教育の概念規定や独自の方法論が展開されていないものが見られる。しかし、最近の「家庭科教育法」や「家庭科教育学」の中には、本質論に基づいた実践に関する研究の記述がなされているものもあり、変革がみられる。